

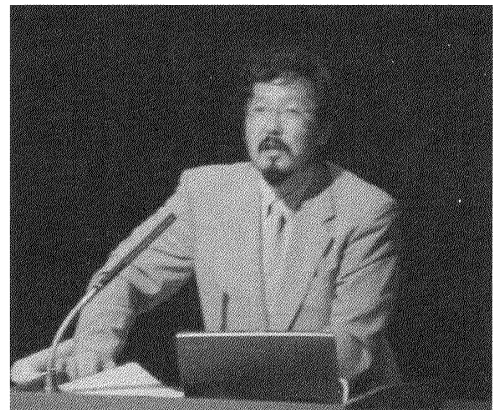


できればと思っております。司会の方、吉田先生よろしくお願
いたします。

吉田：皆さまこんにちは、本日はようこそ幕張までおいでいた
きました。本日司会を担当させていただきます吉田でございます。
早速先生方のご紹介に入って、それぞれご講演をお願いするわけ
ですけれども、本日お招きした先生は4名いらっしゃいます。一
番最初に橋本勝先生、岡山大学におけるFDの実践をやっておら
れるということでお招きしました。二番目にお話しいただくのが
東洋英和女学院大学の有田先生です。有田先生も情報リテラシー
の授業を通してFDをどのように実践的にやっているかということで、大学の事例としてお話
しいただきます。三番目にお話しいただくのが金沢工業大学の小川先生です。金沢工業大学の
場合には大学としてかなり組織化してFDをやっていらっしゃるの、大学として組織化して
いく時の事例ということで小川先生にお話しをいただきます。そして最後に指定討論者とい
うことで筑波大学の山本先生をお願いいたします。山本先生は高等教育を領域としてご研究され
ておられますが、その高等教育研究という点から見てFDの問題をどう考えたらいいかという
テーマでお話しをいただきます。それぞれの講師の先生方のプロフィールは先ほどお配りした
配布資料の中に入っておりますので詳細はそちらをご覧ください。それでは早速先生方のお話を
いただこうと思います。まず最初に橋本先生の方からお願いいたします。

1. 誰にとってのFDか ― 岡山大学学生・教員FD検討会が目指すもの

橋本：岡山大学の橋本でございます。主催者の方から15分ないし20分位で話をしてくれという
依頼を受けているので、本来ならばすぐ主旨といいますか本題に入らなきゃいけないんですが、
性分と致しまして、どこで何を話す場合でも大体前置きに結構、時間を使ってしまうたちで
ございまして、それを急には変えられないものですから、今回の場合もまず少々時間を頂戴いた
します。なぜ岡山大学の事例を紹介するのか、という部分を前置きにしたいと思えます。主催
者の説明によると長年FDをやっているという大学から講師を招いてという話になっておりま
すが、それを読みながら本当かなという気になっているんです。つまり、岡山大学ではそれほ
どFDを活発にやっているという風には明言出来ないと思えます。ただ一通りのことはやって
おります。シラバスにせよ授業評価にせよ、様々な形
でのFDといわれるものは、すべてとはちょっと言え
ませんが大体のものはやっております。その中からい
くつか反省点も出ているし、改善点といいますかそう
いう経験も少しずつ蓄積している、そういう段階だと思
います。ですからそういう意味ではそれほど特異な
例といいますか、先進的な例ということではないと思
います。ならばなぜ岡山大学の人間がしゃしゃり出て
きてしゃべるのかということになります、おそらく



一番大きな理由は私が頼まれると嫌とは言えない、その位の理由ではないかなと思われます。そこを非常にうまく三尾先生あたりが見透かして、奴に頼めば何かしゃべってくれるだろうと、こういう依頼を少し前にいただきましてそれにのってしまったという、それだけのことでございます。ただ、せっかく皆さん遠方からいらしてくださるわけですから、通り一遍の話をするというのでは面白くなかろうということで、今回、岡山大学のやっていることの中で、おそらくは他の大学ではまだあまり見られない話であろうと思われる点をポイントにしてお話をさせていただくことに致します。今日は、「誰にとってのFDか」というふうな題を付けてございますが、副題が付いておりまして、一岡山大学学生・教員FD検討会が目指すもの、ちょっと聞き慣れない組織名が挙がっております。一言で言うならば、FDに学生の力をもっと活用しよう、という動きを今始めているわけです。その辺の話を中心に少しお話をさせていただくということにいたします。

話を学生・教員FD検討会にしぼる前に、岡山大学として何をやっているか、その概要をもしお知りになりたければ、あとでどこを見ればいいのかというようなことだけ先にお伝えしておきます。7ページから8ページにかけまして、主催者の方から大体どういう取り組みをやっているかという問い合わせに応じる形の回答を書いております。つまり大学としてFDをどういう形でやっているか、全学の組織を中心にして少し説明をしております。詳細は略しますがそこをご覧いただければと思います。あるいはその部分に関係するという意味で申しますと、21・22ページ、ちょっと写真等の写りが悪うございますが、「桃太郎フォーラム」、岡山ですので桃太郎なんていうのをを使うんですが、「桃太郎フォーラムⅢ」という去年主催した、一種の教員研修がどんなスケジュールでどういう形で行われているかというようなものをちょっと紹介させていただいております。毎年やっております、ついこの間も「桃太郎フォーラムⅣ」をやりました。たまたまこの資料を出す関係で去年のものになっておりますが、そのあとの部分は少しあとに関係します。その他、いろいろな資料を付けているんですが、32ページあたりからご覧頂きますと、Okayama Universityを省略してOUというものをつけて「OUボイス」という。学生も含めていろいろな層が、大学の教育に対して意見を出し、その意見が雑誌の一部に出ています。こういうものを通じて議論しようという取り組みをすでに何号か積み重ねております。そういうものであるとか、あるいは13ページのところには、大学が教育体制、特に教養教育、教養部を廃止してから教養教育をどうするかということが大きな課題になっておりますが、その部分をどんな形で大学として行っているかを示しておりますが、これはそれほど特別なというものではございません。それから14ページには今年度前期に今までやっていた授業評価アンケートを大幅に変えてこの形に直したものを示しておりますが、これまたずいぶん変わったものなんです。何が変わったかという、質問項目が非常に少ないですし、学生番号を書かせますし、そういう意味で非常にちょっと変わっている点があるんですが、ただこういった点につきましては、それなりにいろいろな大学でいろいろなことをやられていると思いますので、そういう意味から申しますとこの時間を借りて詳しく説明するというほどのものではなかろうと思います。強いて言えば、時間があればと思ったんですが、例えばCD-ROMでシラバスを作っております。これもやっているところもすでにあるかと思うんですが、将来にはWeb化を目指して、いわゆる冊子型のシラバスのいい点悪い点というのを今いろいろ

吟味している、そういうこともやっている。そういういろいろやっている中で、あえて話を、学生・教員FD検討会というものにしぼらせてもらいます。

この資料集の11・12ページが今日の報告のレジメという形にさせていただいている関係で、主として11・12ページを参照されながら以下の話を聞いていただければと思います。先ほども申し上げたように、FDというものに対して学生の力をもっと活用しようと、こういうことを少し前から大学全体として雰囲気作りをしてまいりまして、今動き出したところです。7月11日にそういう組織を立ち上げて、まだ活動し初めて1、2ヶ月、十分な成果をあげているというところまではいっておりません。ただ大学の方針としては、これを半永久的に続ける、あるいはFDの中のかなり重要な要素として位置付けていくことにしております。学生が勝手に作った組織ではないという点です。自主的なサークルとかそういうものではなくて、大学が作った組織でございます。それを作った理由は、三つの契機という形でレジメに書いてございます。ひとつは昨年の全学シンポジウム、これも第8回の名前が示すとおり8年間やっているわけですが、そこに学生を計画段階・企画段階から参加させました。どういう形で全学で教育のことを考えようか、テーマは何にしようか、どういうパネラーを用意しようかとか、どういう議論をしようかとか、そういうことを含めて、学生がそういうことを考える力があるかどうかを試すという意味もあって、学生に参加してもらったわけです。その全学シンポジウムに実行委員として加わった学生が、この形では十分我々の意見がこのまま実現に向けて動き出さないと、少し不満が出ました。もっと恒常的に活動するというそういう組織を作ったらいいんじゃないかと、学生の方から提案がありました。実は教員の方もそういうものが必要ではないかなということをはんやりとではありますが感じていましたけれども、学生の方からまずそういう声が挙がったのです。その時に私がすぐ頭に思い浮かんだのは、今日千葉大の先生もいらしていますが、千葉大の普遍教育学生会議でした。これについては資料として25～26ページに千葉大の当時の副学長の先生が、どういうものであるかを紹介した小論文がございますが、その学生会議というのが少しモデルになりました。ただし千葉大の場合は先ほど申し上げたように日常的に活動する組織という形ではなく、岡大方式をどういう形で作り上げるかということをいろいろ練っていったんですが、最終的には後で申し上げるような組織が出来上がりました。ヒント・先行事例だけでは理論的にやはりちょっと弱いというふうに考えていろいろ探したところが、たまたまなんですけれども目に付いたのが昨年6月に文部科学省から出された報告書です。こちらの方は27ページから抜粋を採っております。一言で申しますと、教員中心の大学から学生中心の大学に大学が変わらなければならないと、文科省自身がすでにそういう方向性を打ち出しています。繰り返しますが、文部科学省からそう言われたから作ったわけではありません。たまたま論理的な肉付けが欲しいと思っていたら、文部科学省もたまたまそういうことを言っていたというわけです。さらに論理的に補強をするという作業もやりました。なぜ学生を引き込まなきゃいけないのか、ここが非常に重要な点だと思うんですが、FDというのは一体誰のためのものなのでしょう。ともすると我々は教員自身が成長するといいますか、自己反省するといいますか、あるいは能力を伸ばすとか、そういう意味でFDはあくまで教員の側の話であるというふうに考えがちなんです。もちろんそういう面はあるかもしれませんが、重要な要素として、授業・教育を受けるのは学生ですから、受益者としてあるいは当事

者として学生自身がやっぱり一番敏感にいろいろなことを感じているはずだと考えるのが自然です。学生自身がもし教育改善を自ら積極的に提言し議論するということがもし成し得れば、それは実は教員が勝手に能力を伸ばすということよりはるかに授業改善につながるのではないのでしょうか。我々の考え方というのはそういうところにあります。現在では、国立大学でも結構高い授業料を払っていますし、非常に多様な受講生が、国立大学でもたくさん入ってきます。そういう中でそのすべてを教員が、たぶんこういう授業が必要だろうという風に、いわば上からくみ取るというのは限界があります。学生が何を欲しているのか、生の声を聞きたい。もちろん先ほど示しましたOUボイスのような形で意見を聴集するというのも一法です。それから授業評価・アンケートで回答してもらうというのも1つの方法です。ただしそれは、どうしても一方的な、向こうから文句を言うとかそういう形でとどまらざるをえません。その時にレスポンスと申しますか、討議が必要ではないか、双方向のインタラクティブな信頼関係の中での議論が必要ではないかと、我々はそう考えてこういう組織を立ち上げようという風に考えました。11ページにあまり意味のない様な図が書いてございますが、大学というものが必ず学生と教員、それから実際に今作り上げた組織もかなり事務方に協力をお願いしているんですが、事務も含めて大学構成員が全体としてFDを進めていかないとFDというのはうまく軌道に乗っていかないと、こういう考え方に立っております。こういう事を申しますと学生というのはそんなにちゃんとした意見を言うものだろうか、特に国立大だからそんなこと言えるんだろうというような考え方をされる方もあるかもしれませんが、実は必ずしもそうとは言えません。授業を受けてそれに対して何か思うということは、私学でも短大でもどこでも同じです。高等専門学校でも同じです。いろいろなところでそういう声は聞きます。それを不満で終わらせないということが大事だというふうに我々は考えて、そういう組織を作ったということになります。

組織構成としまして大体どの位のものを作ったのかと申しますと、学生の委員を各学部から、各学部が責任を持って推薦してくれというような形で2名ずつ、それから二部が岡山大学には少しございますので二部の学生も選んでもらいました。また学生団体、名称はいろいろ大学によって違うと思いますが、学生会のようなものの代表や、生協の代表も選んでもらいました。さらにはきっかけを作ってくれたシンポジウム実行委員にも何人か加わってもらうことにしました。学生の方が約30名強、そしてそれに教員が10名強加わり、全体で4、50名の組織です。これが簡単に申しますと数名ずつの単位に分かれて日常的な活動をします。日常的な活動というのは何だといいますと、いわゆる討議です。今の時代ですから、例えばメール交換という話も当然想定はしましたけれども、学生はどうもそれでは飽き足りないようで都合をつけて集まります。我々が想像している以上にちゃんと議論しています。上限制というのは本当に我々のためになるのだろうかとか、シラバスのここをこうした方がいいんじゃないかとかいうふうに、しっかり議論してくれています。結構、覗かせてもらっているものですからそういうことが断言出来ます。そういう組織を作って、小単位ワーキンググループ(WG)の形で活動しているわけです。特徴的なのは委員長、つまり中心となる人間を学生に任せました。私は一応サブ、副委員長という形でそれをサポートするという役職にはついていますが、基本的には委員長を中心に組織をまわしています。この体制を今後もずっと続けようと思います。レジ

メの方には活動内容という形で少し紹介してございますけれども、基本的には枠の中に囲んでございます6つのWG、このWGに先ほどから申し上げているように数人ずつが加わって討議を重ねていく、こういう形になります。実際には何かこれから問題が生じてくるかもしれませんが、我々が期待したものにうまくっていくのかどうかは、まだ未知数のところが大きゅうございます。ただしある程度期待通りの形で活動し始めた、といえます。その成果は1年後、2年後に出てくるはずです。

学生というのは次々と代変わりしますから、自分達が何か改善要求をしたって、その成果を直接受けられるという学生はまれです。すべて自分達の後輩にしか成果は残せません。そのことは学生は十分わかっています。自分はこういう授業は受けられないけれども、次に続く世代、そういう意味では仲間意識というものを学生は持ちますから、後輩の学生諸君がもっといい教育を受けられるならば、自分達がそれに向けて何か活動しようという意欲をかなり見せています。そういう学生の活力というのは我々自身も大きな刺激となりますし、FDに関して、なるほど学生の力というのを無視出来ない、ということを、また改めて感じ直しております。35ページのところに新聞記事を2つほどあげてございますが、結構マスコミにも注目されました。TVニュースとしても報道されました。もちろんローカルですから皆さんはご覧にならなかったと思うんですが……。これは、先ほどのOUボイスとは違う、大学広報誌、岡山及び近辺の企業であるとか図書館であるとかそういうところに配っている、いわゆる事務的な学内広報ではなし、いわば大学で今何が起きているかというパンフレットです。カラー版も作り始めて大学をいろいろなところにPRしているんですけども、それも次の号でこの学生・教員FD検討会の設立を特集記事として組み、それでさらにPRを進めるなんていうことも進行中です。

限られた時間ですので十分伝わったかどうかはわかりませんが、最後に、FDを進めるために学生の力を借りるということに関し、他に重要となるポイントはないだろうかということで、二つほど話します。ひとつはFDというものを進める場合に、結局は学生という話とある程度は重なるんですが、必ずインタラクティブ、双方向というこの部分を欠かすことは出来ないと思います。どういう事かと申しますと、我々は全学、授業担当の講師以上の教員は岡山大学には千人以上いますけれども、その千人の意思統一というのは非常に難かしゅうございます。そういう中で専門委員会がこういう提案をしたぞ、だからこれに従ってくれというような、トップダウンでは到底受け入れられません。あるいは受け入れられたとしてもそれは表面的な受け入れです。従って必ずキャッチボールを繰り返します。第一次提案としてこういう提案をするけれども、全学としてこれを受け入れてくれるかどうか、これを学部に戻して反論を待ちます。すると一杯反論が来ます。それを受けて修正提案をすると、また反論が来ます。そういうことを何回か繰り返す。何の提案をする場合でも、大体三次提案から、四次提案位で初めてこれなら全学的な合意が何とかいけるかなというような感じでやっております。そういう双方向ということをかなり意識して、いろいろな場面でそれをやっているとそれが例えば学生というところにもつながるわけです。それからもう一点は、先ほど三尾先生も少しお話しされましたが、FDというのは結局はもう個人の問題ではありません。入り口はそうかもしれないけれども、やはり組織としてどう取り組むか、大学全体としてどう取り組むか。一部の先進的な人間が、

あるいは非常にそういうことに関心がある人間だけが取り組んでいても、大学全体は変わりません。全学をどうやって動かしていくか、そういう意識をやはり常に持つ必要があって、そのためにはどうするかというような姿勢で、少しずつ議論を進めていく。そして、全学の組織というところを考えた時にも、やっぱり学生という要素が見えてきます。いろいろなところで学生ということにつながるという意味もありまして、岡山大学の学生・教員FD検討会というものを中心にお話をさせていただきました。資料としては結構いろいろなものを付けてございますので、後でまた質問等ございましたらお答えしたいと思います。

吉田：橋本先生、どうもありがとうございました。それでは引き続きまして有田先生、よろしくお願いいたします。

2. 同一科目の複数開講における授業内容の統一と関連情報の交換システム



有田：ただいまご紹介にあずかりました東洋英和女学院大学の有田と申します。という位の声の大きさでよろしいでしょうか、というふうに聞くのがFDの別のところの事業研修で習ったことでございます。始めさせていただきます。今回FDに関する事例紹介として、私が担当しております「基礎情報科学」という授業の中でFDシステムがうまく動いている部分についてをお話するようということでもございました。けれども、おいで

になっている先生のご関心が一授業というよりはむしろFD全体に関してのことが多いように思いましたので、私もちょっと長めの前置きをさせていただきます。FDに関して私自身が初めて関わったのは学生時代でございます。先生が勝手にべらべらしゃべっていて自信満々でやっているけど、学生が寝ているという先生もいるけれども、一方では一生懸命でとても熱心な先生がいてそのノウハウが公開されていない状況でした。「レスポンスアナライザー」とか「S-P表」を使いますと少しは授業がうまくいくんだということを学びました。とってもいい方法があるんだよということを、他の先生に知らしめるためにはどうしたらいいんだろうかということを考える分野があるという話を学生時代に聞いて、目から鱗だったのを覚えています。「FD」という言葉自身は非常にわかりにくいと思います。インターネットの辞書を引いてみたら、「フロッピーディスク」は出てきたのですが、自己評価という言葉は載っていない。そこで他の言葉をいろいろ考えてみました。私自身がふれてきたのは「教育工学」とか「CMI」という言葉で最初に入りました。もうひとつ、これは富士通の本から言葉をいただいたんですけど、今ふうの言葉で言うとナレッジマネジメントではないでしょうか。先ほども教育工学をというところでちょっと申しましたけど、「誰かさんがとてもいいことを知っている。」「誰かさんの知識を全体のところへ何かうまく情報として与えて、みんなが共通にそれをうまく使えるようにしよう。」、というのがFDではないかと私は捉えております。せっかくいい手法を誰かやっているならば、それを他の環境へうまくあてはめていくというのは、